



日台連携における高校生の国際協働教育プログラムの実践 —不登校経験を乗り越えて未来を拓く防災教育—

伊藤創平（高知大学防災推進センター 客員助教授）

sohei.ito.pacci@gmail.com

大槻知史（高知大学地域協働学部/高知大学防災推進センター 教授）

tsuki@kochi-u.ac.jp

要旨

現在、日本の教育的課題である不登校児童生徒の増加を背景とし、定時制・通信制の私立高校 A 校（高知県）では、生徒の学習空白による対人関係の希薄さや社会経験の不足が深刻な課題となっていた。筆者は、持続可能な社会経験の場として、南海トラフ地震のリスクが高く社会性育成に適した「防災教育」に着目し、2018 年より高知大学との高大連携を通じた減災協働教育を実践してきた。

2026 年の創立 80 周年を契機に、A 校は高知大学、および同大学と包括協定を結ぶ台湾の国立暨南国際大学との 3 者共同プロジェクトを発足。2025 年 10 月から選抜生徒 6 名による防災チームが事前学習や国際ワークショップを重ねた後、台湾研修を実施した。研修では、時間軸に沿って備えを促す「防災ワークショップ」や、日台の震災交流の象徴である紙教会での震災伝承イベント「燈ノひかり」を行い、地元メディアに報じられるなどの成果を収めた。

日本の「伝承・語り部」と台湾の助け合いの精神「天佑台湾」という互いの防災文化を学び、海外という異なる環境下での共創を経験したことで、参加生徒の自己評価には、他者とのコミュニケーションの捉え直しや自己課題の発見といった前向きな変化が見られた。本実践は、不登校傾向にある若者の対人関係・社会経験の課題解決に向け、日台の防災連携を通じた国際協働教育が極めて有効なアプローチ

になり得ることを示している。

本文

現在、日本における教育現場が抱える最も大きな課題の一つが不登校である。近年その数は増え続け、小・中学校における不登校児童生徒数は 2022 年度で 299,048 人(前年度 244,940)となった。1,000 人当たりで 31.7 人(前年度 25.7 人)であり、全体の 3.2%(前年度 2.6%)に当たる。不登校児童生徒は、10 年連続で増加し、その増加率も年々高くなっている。(「令和 4 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査概要」文部科学省)

急増する不登校生徒の受け皿となっているのが、定時制や通信制高校である。通信制高校に在籍する生徒の実態調査では、「小中学校及び前籍校における不登校経験がある生徒」が狭域通信制 48.9%、広域通信制 66.7%となっている。(「定時制、通信制高等学校における教育の質の確保のための調査研究」報告書、平成 29 年度文部科学省委託事業)

筆者の勤務する A 校は、1946 年設立の定時制・通信制が併設している高知県の私立高校である。現在の在籍生徒数は、定時制、通信制を合わせて約 500 名である。特に、ここ十数年は不登校経験のある生徒の入学が多くを占めている。その背景は様々であり、A 校入学後の生徒の姿も一概には言えず、学習意欲や習熟状況においても個人差が大きい。このような状況の中で、2015～2017 年度には「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」(文部科学省)を受託し、独自の自立支援プログラムの開発に注力し、先進的な取り組みを行なっている。一方、学校に通っていない期間(学習空白)による対人関係の希薄さや社会経験の無さ、協働的な活動に対する消極的な姿勢は深刻な課題となっている。そこで、A 校では校外市民との関わり、様々な対人関係や社会経験を積ませるためボランティアや職場体験を制度的に運用してきた。しかしながら、このような制度も十分とはいえず、生徒本人や担当教員への過度な負担から活動内容を限定したり、活動自体の縮小を行わなければならない、生徒の学習や成長の機会が限られてきた。

そのような状況の中、筆者は持続可能な形で生徒に対人関係や社会経験を積ませることはできないかと模索し、2018 年より高知大学防災推進センター危機管理部門との連携しながら様々な減災を通じた協働教育の実践を始めた。減災や防災がテーマとなった理由として、一つに高知県がマグニチュード 8～9 クラスの巨大地震が、30 年以内に 70～80%発生する(地震調査研究推進本部地震調査委員会)と言われ防災のリスクが高い土地であるからである。二つに、防災教育は社会性の育成を学校教育の中で行なっていくことに適しているからである。先行研究でも、『「従来の学力ではとらえきれない真の学力、知力を育てたい」(生活力)、「連帯して共に社会をつくる人間(市民)を育てたい」(市民力) —このような、現在、教育界で盛んに議論されていること、ひいては、社会全体で切実な課題となっている非常に大きな目標(つまり、夢)の実現にとって、防災教育は絶好の機会(チャンス)を提供する』(「夢みる防災教育」p3, 矢守克也・諏訪清二・船木伸江著, 2007 年発行, 株式会社晃洋書房)と述べられている。

加えて、2026 年に A 校が 80 周年を迎えるにあたって、これまでの防災教育の深化とより広いつながりを作るため、台湾との交流を始めた。前段として、2024 年には担当教諭が日台連盟において日本での防災実践の発表を行い、2025 年には今回受け入れを依頼していた国立暨南国際大学(以下、NCNU)を訪問した。NCNU は台湾中部の南投県に位置し、1999 年に発生した 921 地震の震源地である。近年も 2024 年には花蓮地震が発生するなど、日本と同じく地震大国であり、防災対策において様々な知見を共有できる。また、台湾は歴史的に日本との交わりが多い。戦前の日本統治時代の建物や風習が色濃く残り、国

民性としても日本と近いものがある。これらの理由から、本校では台湾との防災教育の連携を実施するに至った。連携を進めていく上で、本校と NCNU をお繋ぎ頂いたのが高知大学である。上記のように A 校は高大連携として高知大学と連携しており、高知大学と NCNU は包括協定を結んでいることから、本校・高知大学・NCNU の 3 者での共同プロジェクトが発足した。これに伴い、2025 年 10 月より生徒 6 名、教員 6 名の防災チームが発足した。生徒は、ボランティアや生徒会、防災を担当する教員からの推薦により選出された 6 名であり、教員はそれに関する者である。まず、2025 年 10 月より半年間本校の防災関係講座にて、インドネシア留学生との合同授業を行なった。その中で、高知県の沿岸部に位置する須崎市をフィールドとして、数回の訪問と地域住民へのプレゼンを行なった。2026 年 2 月には、同市で行われた国際ワークショップに参加し、1 週間の現地調査と地域特性を活かした防災ゲームの開発を行い、行政提案をした。4 月からは、台湾華語講座、台湾中学生の受け入れなども行なった。

国際交流を行う際、重要になるのがその国と日本の文化比較である。台湾と日本の防災文化を説明するとき、象徴的に言葉がある。「天佑台湾」と「伝承・語り部」と言う文化である。詳しくは、国立暨南国際大学助理教授で今回の受け入れの主である林怡資先生の筆にて説明されているので、ここでは簡単に触れる。「天佑台湾」とは、台湾の国民性として楽天的であり、地震が来ても天が助けてくれると言うものである。ここでは、事前防災の重要性が認識されにくい、発災後の助け合いが生まれやすい側面もある。一方で、「伝承・語り部」とは日本の防災上、最も優れたシステムであり、天災だけでなく戦争などの悲惨さや備えの重要性を国民全体で共有するための装置として機能し続けている。このことで、事前防災の意識は世界的に高いと言えるが、発災後の支援プロセスについては、行政主導の色合いが強い。このことから、台湾研修プログラムの中で防災ワークショップや震災伝承（「燈ノひかり」）のイベントを実施することが計画された。詳細な日程については、末尾の図で示す。

ここでは、表 1 の赤字で示した「防災ワークショップ」と「震災伝承イベント（『燈ノひかり』）」の二つについて取り上げる。まず、防災ワークショップであるが、これは A 校が日本で行ってきたものを台湾華語に翻訳したものである。発災直後や避難所までの経路を時間軸に沿って想像することで、備えを促すことを目的としている。成果として、ワークショップの中で個人でできる備えを提案できたことがある。特に、「枕もとのライト」や「(避難時の) 室内靴」など安く・簡単に・効果的な備えを実現できることを具体的に伝えられた。一方で、震災伝承イベントは、日台の震災における交流のシンボルである紙教会でキャンドルライトを使った文字を描いた。紙教会は、1995 年阪神淡路大震災を受けて神戸に設置され、1999 年 921 大震災の際に台湾に移築された建物である。キャンドルライトでは「台 9. 21 日」という文字をハートで囲うデザインであった。参加者は、紙教会が設置されている桃米生態村の関係者や NCNU の教職員・学生など 40 名程度であった。この成果としては、非常にシンボリックな場所で開催できたこともあり、地元メディアでも取り上げられ、NCNU の武学長などの参加もあり、参加者に災害について再考してもらうだけでなく、広く台湾市民にこのプロジェクトを知ってもらう機会となったことである。

これらの成果は、参加生徒の自己評価の変化に大きく影響した。例えば、事前の自己評価において「Q: 学習や人間関係において今まで避けてきたことはあるか」というものに、「A: その人に対してきつく言うことで~~害~~傷ついて逆効果になるのが怖いから」との回答があった。事後の自己評価では「A: これまではその人に対してきつく言うのを避けてきたけどその人のためになるなら、時と場合と言い方に気をつけながら、相手に伝えることの大切さを知りました」と、自身の立場や場面を考慮したコミュニケーションのあり方に関して学んでいることが分かる。文化的に近い日本と台湾とはいえ、若者のコミュニケーション

ョンの方法は大きく異なる。そのことで、自分のコミュニケーションを俯瞰できたのではないかと考えられる。また、研修を通して「Q:日本に帰ったら何をしたいか」というもには、「A:たくさん食べて、体力をつけたい」と、海外という慣れない環境のもと自己課題を発見し、それに対しての取り組みを掲げていた。以上のように、対人関係や社会経験において台湾研修を通して、そこでしか得られない学びを掴み取っていることが分かった。

今後、不登校のみならず若者の社会経験の欠如や対人関係における課題は社会の中で膨らみ続ける。今回のような日台における防災連携を継続していけば、こういった課題に対しての解決の糸口を見つけることにつながるだろう。



表 1 研修の日程

6月8日(月)	
9:00	A校出発（教諭3名）
13:20-15:40	フライト 高松空港—台中空港
17:00	ワークショップの準備（起振装置等の組み立て）
6月9日(火)	
7:30	PULI朝市見学
9:00-11:00	一新社区見学（真菰収穫体験）
14:00-15:00	慈恩社区訪問（ワークショップの事前打ち合わせ）
15:30-17:00	枇杷社区見学
6月10日(水)	
9:00-12:00	禾安康高齢者施設感謝会（起振装置ワークショップ）
12:30-13:00	昼食
13:00-17:00	台中空港にて歓迎（教諭3名、生徒6名）
18:00	歓迎会
6月11日(木)	
9:00-11:00	九份二山見学（土砂災害地域）
11:30-13:30	慈濟北山回收場見学
14:00-16:00	ナマズの防災教室@慈恩地区
17:00-21:00	「燈ノひかり」イベント@紙教会
6月12日(金)	
10:00-13:00	ナマズの防災教室@集集小学校
13:10-14:00	武昌宮見学
14:00-16:00	内政部消防訓練センター
18:00-20:00	PULI夜市
6月13日(土)	
9:00-13:00	キャンパスツアー@国立暨南国際大学
15:00-16:00	921地震教育園區見学
6月14日(日)	
8:50-12:20	フライト 台中空港—高松空港
13:30-16:00	ジャンボタクシーにて帰着